

支部見聞録 (沖縄支部)

From 那覇



▲世界遺産、識名園。那覇まちま〜いでは、庭園や家屋の構成に秘められた理由や蘊蓄が語られ、理解も興味も深まる

新しい観光の形をつくる — 那覇まちま〜い

「那覇まちま〜い」は、一般社団法人那覇市観光協会が立ち上げた、ガイドとともに行くまち歩きツアーだ。ガイドブックにはない視点から町を探访するユニークな企画で着実に人気を集め、繰り返し利用するファンも多いという。その魅力と可能性を那覇に訪ねよう。

知らなかった那覇を発見するユニークなツアー

本当にここはにぎやかな国際通りから10mほどの場所なのだろうか？ 細い路地の片側は、ジャングルのような鬱蒼とした緑だ。歩行者天国で演じられているエイサーの太鼓の音が聞こえてきて、異世界へ迷い込んだような不思議な感覚に襲われる。

実際にまちま〜いを体験してみようと参加したこの「国際通りのワキ道ヨコ道ウラの道」コースは、驚きと発見に満ちている。大通りからちょっと裏に入るだけで、すれ違うのがやつの細い路地が走り、築50年60年の民家があり、あちこちに点在するこんもりと木々が茂る丘には沖縄式の大きな墓がたたずむ。「戦前まではこのあたりは田舎で、緑の中にたくさんのお墓がありました」とガイドは語る。1600年代から現代に至るまで100基以上の遺構が残る「ナイクブ古墓群」も遺されていて、発掘調査が行われ、公園への整備が進行中なのだそう。昔の地図や絵画、古い写真も見せながら、こうした那覇のまちの成り立ちや変遷、地名の由来など、興味深い話が紹介されていく。沖縄初のデパート山形屋の跡地がホテルJALシティになり、三越が閉店し、復帰直後に安藤忠雄氏の設計で建てられたビルが最近ドン・キホーテ国際通り店になったというのは、急速に進む時代の流れの表れだろうか。

一般社団法人那覇市観光協会が行っている那覇まちま〜い

は、50を超えるコース設定の多彩さ企画のおもしろさ、料金は1,000円から、現地集合で参加者が一人だけでも催行という手軽さで、参加者の心をつかみ、根強いファンを増やしている。リピーターが非常に多いのも特長で、実際今回参加したまちま〜いで一緒になった3名の参加者はすべて複数回のリピーター。うち一人は県外から嫁いで30年の地元の人で、那覇の住民でもあまり知らない場所を探访できるのが魅力だという。

キーワードは“観光まちづくり”と“滞在交流”

2年間の試行期間を経て那覇まちま〜いがスタートしたのは、2010年12月。2006年に長崎で行われた日本初のまち歩き博覧会「長崎さるく博」が成功をおさめ、テレビ番組「ブラタモリ」が人気を博するといった、町歩きへの関心の高まりを受けてのことだった。那覇は独特の歴史や文化、民俗、生活がある魅力ある都市。しかし一般には那覇の観光といえば首里城と国際通りというイメージばかりが強く、訪れる人の8割がリピーターなのに、本島内のリゾートや離島への足場にするだけで、素通りする人も多いという現状があった。「打破するには、那覇の魅力を伝えること。それには地元ガイドと歩くのが有効だと考えました」と那覇市観光協会マネージャーの千住直広さんはいふ。

まちま〜いのシステムを構築する際には、留意したことが二つあった。一つは単に観光を盛り上げるだけでなく、市民と協働して取り組むことで、観光をまちづくりにつなげることだ。ガイドは、那覇の歴史や民俗文化、ガイドの心得や実践的ノウハウを講座で学び、実際にコースに出て実習も行った上で登録される。報酬も



▲コースの概要が記されたマップ
 ▲裏道と対照的なぎやかな表通り

▶国際通りの裏にこんな風景が
 ▼写真や絵も使って解説する



▲草木が生い茂る巨大墓
 ▲すれ違いできないような裏道も



▲五角形の造りが珍しい、空き家



得て活動し、現在、人数は登録ベースで100名にのぼるといふ。「ガイド自身那覇への理解をさらに深めることになりますし、案内した県外客から文化や民俗への賞賛の言葉を聞けば、地元の良いさを再認識して愛着や誇りも増します。おのずから那覇の魅力をもっと知ってもらおう、まちをもっとよくしようという気持ちになって、長い目ではまちづくりにもつながっていくと考えています」。

もう一つは、観光を滞在交流型としていくこと。コース自体は60分～120分でも、その中で得た情報や知識をもとに参加者が自分なりのまちなみを楽しんで買い物や食事をするなど、滞在時間を延ばすことを目指す。早朝6時からのコースや夜のコースを設けているのも、宿泊型の滞在に対応するためだといふ。

「さらに、一般市民でもあるガイドと参加者、参加者同士の交流の中から、那覇にシンパシーをもつ人を増やしていきたい。何かあった時にも応援されるような観光地を目指したいですね」。

魅力溢れるまちなみで新しい観光の創出を

魅力あるコースづくりには、9人いる本部スタッフが担当。エリアに当たりをつけて現地調査を行い、地域の有識者にも話を聞き、図書や文献も調べてアイデアを練る。年1回、ガイドによる企画コンテストも行って最優秀作は実際にコース化している。50以



▲識名園の水源、名水「育徳泉」を見る



▲少人数だから説明もじっくり聞ける



▲首里城の1本の樹にも物語がある

上あるコースの中から、季節ごとに内容を変え、常時実施しているのは30コースほど。「首里城～琉球王国への誘い」といった王道のコースから、「地元客が集まる沖縄食堂」「探して歩こう 沖縄の魔除け」「知ってびっくり! 那覇空港」といった通好みの企画、お酒も楽しむ「寄んな～酔んな～桜坂」「栄町市場de過ごす大人の時間」などというものもあり、適宜、見直しやリニューアルも怠らない。

参加者は2011年度の6,000人から着実に増え、2013年度は約1万人。現在40代～60代の利用が3分の2を占めるため、若い人の参加促進を図るために、新しいコースづくりに取り組んでいる。採算性の向上や台湾を中心とした海外観光客の増加への対応も課題だ。外国人相手のガイドには資格が必要だが、沖縄県が県内限定の通訳案内士の養成に乗り出すなど対応を強めていて、まちなみでも資格者のガイド登用を視野に入れているといふ。

将来的に目指したい利用者数は、年間6万人。スタートして4年、当初6:4だった利用者の地元客と県外客の割合は、利用者を増加させつつ現在2:8に。県内に存在が浸透し、県外への知名度を拡大中だ。加速度を増して大きく花開くことができるか、今日もスタッフやガイドの熱い取り組みが続いている。



▲那覇きっての観光スポット、首里城。「首里周辺など一定地区に建てる家は必ず赤瓦をのせなければいけない」といった条例があるなど「那覇まちなみ」ならではの説明が聞ける

別冊 FROMはウェブサイトへ
 eふぁみり もあわせてご覧ください!
<http://jp.fujitsu.com/family/honbu/family/>
 どの家の屋根にも給水塔があるのはなぜ? を紹介しています。